

草津市総合教育会議 会議録

令和7年9月25日開催

草津市役所 4階行政委員会室

出席者	草津市長	橋川 渉
	草津市教育委員会	
	教 育 長	藤 田 雅 也
	委 員	我 孫 子 智 美
事務局	委 員	森 登 世 美
	委 員	小 辻 寿 規
	総合政策部長	岸 本 久
	こども若者部長	山 本 陽 一
	こども若者部理事（こどもの居場所づくり担当）	板 垣 裕 之
	教育部長	高 岡 良 秀
	教育部理事（スポーツ担当）	奥 谷 美 津 子
	教育部理事（学校教育担当）	菊 池 誠
	総合政策部副部長（総括）	山 際 喜 一 郎
	こども若者部副部長（総括）	松 永 祐 子
	教育部副部長（総括）	安 藤 智 至
	教育部副部長（スポーツ担当）兼国スポ・障スポ推進室長	岩 城 弘 宜
	教育部副部長（図書館担当）兼 図書館長	二 井 治 美
	教育部副部長（学校教育担当）兼 学校教育課長	西 田 和 弘
	企画調整課長	門 田 忍
	まちづくり協働課長	小 川 卓 史
	こども若者政策課長	織 田 泰 行
	教育総務課長	山 田 晋 作
	生涯学習課長	山 田 貴 彦
	スポーツ推進課長	遠 藤 敦
	児童生徒支援課長	建 林 伸 彦
	学校政策推進課	名 田 雅 信

児童生徒支援課長補佐

高 橋 正 樹

生涯学習課係長

丸 山 春 菜

老上まちづくり協議会長

山 本 清 治

老上まちづくり協議会事務局長兼センター長

日 下 部 順 子

コーディネーター

渡 井 友 莉 香

サポーター

岡 田 雅 哉

令和 7 年度 草津市総合教育会議 次第

日時 令和 7 年 9 月 2 5 日（木） 1 0 : 0 0 ～

場所 市役所 4 階 行政委員会室

1 開会

2 議題

（1）主体的なこどもの取組への支援について

（2）「地域版 ESD」の推進について

3 閉会

開会 10時00分

市長

定刻となりましたので、令和7年度草津市総合教育会議を開催いたします。

まず、「総合教育会議」は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の4に規定されている会議でございます。市長と教育委員会が教育課題や目指すべき姿を共有し、連携して教育行政を推進していくために開催するものです。

本日の会議は、2部構成となっております。第1部が「主体的なこどもの取組への支援」、第2部が「地域版ESDの推進」ということで意見交換をしていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。会議の進行につきましては、事務局でお願いします。

教育部理事(学校教育担当)

教育委員会事務局の菊池でございます。

市長から会議の進行を委任いただきましたので、第1部は私の方で進行させていただきます。議題は「主体的なこどもの取組への支援について」です。まずは、担当課であります児童生徒支援課から説明をお願いします。

児童生徒支援課長

児童生徒支援課の建林でございます。

今年度の草津市総合教育会議では「主体的なこどもの取組への支援について」と題し、こどもの現状やその背景、これまでの学校でのこどもたちの取組から今後の草津市における取組や施策の在り方などについて、様々な視点から御協議いただければと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の御説明の流れについてです。

はじめに、「こどもの置かれている現状やその背景について」御説明いたします。次に、「本市の中学校での取組について」、そして「わたしたちが創りあげる学校」に向けての課題についてお話しします。最後に、「こどもまんなかの学校をつくるために」というように進めていきたいと思っております。

はじめに、こどもの現状とその背景について御説明いたします。

「国や社会に対する意識調査」の中の一部を紹介します。この調査は日本財団が行っている調査で、対象は18歳の若者です。「自分は大人だと思う」、「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」の項目について令和元年度と令和6年度に同じ調査が行われ

ています。肯定の回答率は上がっていますが、日本はいずれも50%を切り、他国の若者に比べ、日本の若者の自己肯定感や自己効力感が低い実態が数字に表れています。全国学力・学習状況調査の質問紙の草津市の小・中学生結果を見てみると、「自分には、よいところがあると思う」では小学生 86.8%、中学生 83.3%となっており、小中学生ともに8割以上の肯定率となっております。また、「将来の夢や目標を持っている」という項目については、小学生では81.0%、中学生では66.1%の肯定率となり、いずれも全国平均を少し下回っているという結果になっています。これは社会の中のこどもとおとなの関係について表した図です。左の図のように、これまでの社会では、おとなが中心となって、こどもにとってよいことをおとなの目線で考えてきました。学校では校則や決まりがその一例になっています。こどもは与えられる存在でしたので、小さくなっています。これからは右の図のようにこどもが中心となる社会、学校になっていかなければなりません。日本でも、子どもの権利条約が批准され、令和5年にこども基本法が策定され、施行されました。当事者であるこどもの目線を大事に、こどもの権利を大切にすることが必要です。こどもをまんなかに、おとなはこどもの伴走者として、こども基本法の4つの原則の1つ「こどもの意見を聴く」ことを進めていくことが大切です。

これからのこどもたちに着けたい力とは何かについて説明したいと思います。現行の学習指導要領では、こどもたちにつけたい力として「生きる力」を中心に据えています。ここでは、「特別活動」や「ESD」に関して、こどもたちにつけたい力を表しています。左側にあります「他者と協力する力」、「進んで参加する態度」、「コミュニケーションを行う力」が主に特別活動で、右側にあります「批判的に考える力」、「多面的・総合的に考える力」、「未来を予測して計画を立てる力」は主にESDでつきやすい力と考えています。「生きる力」の下に記載してある「つながりを尊重する態度」は両方でつける力と考えています。取組の1つとして、草津市では「ESDくさつプロジェクト」を推進してきました。ESDは各教科等の学習の基盤の上に、横断的・総合的な内容で構成されています。また、特別活動は、学校生活全体にわたる体験的・実践的活動で構成されています。特別活動は、身近な社会、つまり学校の中で行う、協働的・自治的な活動であり、日常的・継続的に行われるものです。特別活動を進めることで、こどもたちは達成感を味わうことができ、実践力、責任感、生

徒間の人間関係形成力を高められます。よりよい人間関係を築くことにより、いじめの防止にもつながります。このように特別活動で望ましい人間関係を形成する力をつけることによって、ESD の学習にも活かされます。また、ESD で得られた力や態度を特別活動に活かすことができ、好循環を生むことができます。

ここからは、市内の中学校での取組について4つ紹介します。

1つ目です。修学旅行にスマホをもっていくことができるかということが話し合われました。修学旅行の思い出に残る写真を撮りたいというこどもの願いが出され、その中で、スマートフォンの必要性や懸念されることなど細かいことも含めて、実行委員会で話し合いを重ね、ルールを自分たちで作リ、実現していきました。修学旅行にスマートフォンを持っていくことについての文書をこどもたちで作成し、教職員との連携を図り、保護者へ配布しました。生徒・教職員・保護者との連携を図り、個人のスマートフォン使用を実現しました。自分たちで決めたことをやり遂げたことで、生徒の自信が付き、新しいことにもチャレンジしたいと思うようになりました。同時に、こどもたちは、はじめて自分たちで進めたので難しさも感じていました。話し合う時間の確保や時間の調整、おとなとの連携をどのように図るとよかったのが課題として残っています。

2つ目です。昨年度から、文化祭や体育祭などの行事に向けて、団が一つになるように、生徒の結束を図り、きずなを深められるように開催しています。こどもまんなかの学校づくりの理念を理解し、生徒会長が中心となって昨年度から取組がはじまりました。生徒がたまぞう祭の企画・準備・運営にあたり、「自分たちの力ですべてをやり遂げたい」という気持ちで、「生徒中心」ということを目標に取組を進めています。学年の枠をこえて、団の結束を図ることによって、そのあとに行われる行事では盛り上がりをみせ、仲間とのきずなを深めることができます。一方で、開催するにあたって、たまぞう祭を盛り上げている学校のマスコットキャラクターの着ぐるみの修繕をしたり、クリーニングしたりしていることや気持ちを高められる会場設営や小道具などの費用について今後考えていく必要があります。

3つ目です。すばらしい思い出を残す1年になるようにというテーマのもと、生徒会活動に取り組んでいる学校を紹介します。体育祭で、生徒会種目を取り入れています。体育祭は、気持ちを一つにして、人と人をつなぐよい機会です。生徒は企画するにあたって、自分たちのできる範囲のことを精一杯取り組んでいます。しかし、こど

もたちには、昨年度と同じ事をしていたのでは、新鮮味に欠け、体育祭を盛り上げることができないと考えています。今後についても、生徒会種目の選定について、幅が広げられるようにしていきたいとこどもたちは考えています。しかしながら、新しい種目を行うためには、用具をそろえる必要があり、多くの費用がかかるという課題が残っています。

最後に、こちらは、新堂中学校で従前から取り組んでいる全校道徳劇の様子です。この取組を誇りに思っている生徒は、全校道徳劇の内容を生徒会を中心に決め、話し合いを重ね、上演しています。その後、この劇をもとにした道徳の授業を教員が行います。生徒が演じた劇を保護者や地域の方にも紹介し、保護者や地域の方々の人権意識が高まるように願っています。自分たちで創りあげた劇を保護者や地域の方に取組紹介するにあたって、専門家に撮影や編集を依頼して記録した映像のクオリティを上げ、保護者や地域の方によりよいものをみてほしいという生徒の願いがあります。

次に、これまでの各校での取組紹介と合わせて8月20日に行われました草津市こどもサミットで話し合われたことを基に、わたしたちが創りあげる学校に向けて、こどもと教員が考える課題を次に挙げていきます。こどもたちは、「こどもたちが創りあげる学校」に向けて5点の課題があると感じています。

1点目は、こどもたちはやりたいと思うことがあっても、こどもたちの中に、どうせできないと先にあきらめている雰囲気があると感じています。こどもにやってみようと思う気持ちを持たせることが鍵になってきます。

2点目は、生徒同士のつながりについては十分ではないと感じています。生徒同士のつながりは身近にSNSがありますが、話し合い活動ではお互いに納得して物事を進めているというようには感じていないかもしれません。

3点目は、生徒がやりたいことがあっても職員会議で通らない、生徒会がこどものものではないと感じています。

4点目は、やりたいこと、取り組みたいことがあっても、活動に使えるお金が少ないと感じています。

5点目は、学習や部活等にかかる時間が多く、自由に使える時間が少ない、生徒間で話し合う機会や調整が難しいという意見があります。

一方、教職員が感じていることです。

1点目は、教職員のこどもまんなかに対する理解がそれぞれで、その差が大きいと感じています。こどもまんなかの学校づくりを進める上で教職員の役割、おとながどのようにかかわっていくのかの共通理解やこどもにどんな力をつけてほしいのか、同じ方向を目指すことが必要になってきます。

2点目は、こどもまんなかの取組を学校の中でどのように位置づけていくかを考えていかなければならないと感じています。そのためには、ビルドばかりでは学校が立ち行かなくなるので、スクラップすることが必要だと感じています。

3点目は、こどもと同様に、生徒会担当の教員も、職員会議で子どもの案を提案しても通らないと感じています。

4点目は、こどもがやってみたいことをすべて取り組むことはできません。時間や場所、費用などの制約がかかります。特に、費用については保護者から徴収している生徒会費をやりくりしているのが現状です。

5点目ですが、こどもは自分たちで学校を変えてきた経験が少ないので、取り組みたいことを実現させるための道筋がわかっていません。様々な取組を仕掛けることで、学校としてこどもたちの経験値を上げる必要があります。

「こどもまんなか社会」の実現に向けて、草津市こどもサミットを開催し、こどもの意見や声を聴いて、各校で取組を進めています。学校の現状とこども、教職員からの視点で課題を説明させていただきました。

教職員、市教委、保護者、地域としてできること、それぞれの立場でおとなが支援できることは何かについて御協議いただければと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

教育部理事(学校教育担当)

説明ありがとうございました。それでは30分程度になるかと思いますが、意見交換の方をお願いしたいと思います。

まず、質問を中心にしたいと思っていますが、質問や御意見があれば、どうぞよろしくお願いいたします。

市長

まず、質問をさせてもらいますが、スライドの4ページで日本財団の調査結果を挙げていますが、令和元年度と令和6年度で日本の数値が2倍近く上がっていますが、意識が変わってきたのか、喜ばしいことなのか、変わった原因は何でしょうか。上がってきたとはいっ

児童生徒支援課長

でも、低い数字なので問題が解消されたわけではないと思います。また、5 ページの令和 7 年度全国学力・学習状況調査結果では、先ほどの数字と項目が違うので一概には言えないと思いますが、小学生・中学生の時は自己肯定感が高いですが、18 歳になると落ちてしまっているの、下がってしまうのは何か理由があるのでしょうか。

もう1点、中学校の取組ですが、課題も含めて特別活動のことでよいのでしょうか。スクールESDもしっかりしていただいていて、スライドの 7 ページでは、特別活動とスクールESDの好循環を期待しているような内容だったと思うのですが、成功事例やそこでの課題があればお願いします。

最初に、スライドの 4 ページの日本財団調査結果についてですが、令和元年度と令和 6 年度の大きな違いは、令和元年度は、「自分を大人だと思う」、「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」への回答が「はい」と「いいえ」しかありませんでした。令和 6 年度は、「はい」と「どちらかといえばはい」の回答となっており、若干、聞き方が変わっていますので、差が開いていると思います。それに加えて、成人年齢が 18 歳に引き下げられたこともあるのかなと思っています。また、こども基本法が令和 5 年にできましたので、それも関連しているかもしれません。

また、草津市のこどもですが、自尊心や自己肯定感を高めたりというのは、小学生、中学生の中でも課題になっていますので、学校では教職員が意識しているということはあると思います。取組やこどもに自信をつけさせることを日常的に行うことでそれらが高まっていくのかなと思います。例えば、令和 7 年度の全国学力・学習状況調査結果では「将来の夢や目標を持っている」ということが、小学生 81.0%と中学生 66.1%と差があると思いますが、年を重ねるごとに、見えなかったものが少し見えてくるということがあると思います。ただ、18 歳のところについては、私どもではわかりにくいところがありますので、お答えが難しいかなと思っています。

さらに、各中学校の取組ですが、基本的に学校の特別活動に含まれるかなと思います。生徒会活動が中心となってくるかなと思いますが、修学旅行のスマートフォンの使用については実行委員会をつくって、こどもたちが自主的に活動していく様子が見られました。

また、好循環の事例ですが、ESDについて、ある学校ではその

	取組を進めてきたことによって、特別活動に活かされているということがあります。結果として、いじめの件数が減ったということがあります。具体的な例を今というのはなかなか難しいのですが。
教育部理事(学校教育担当)	補足はありますか。
副部長(学校教育担当)	市長がおたずねの自己肯定感の件です。全国学力・学習状況調査結果ですが、草津市だけのこどもたちの経年変化で言いますと、小学生は5年前79.6%だったのが現在は86.8%、中学生は5年前75.0%だったのが現在は83.3%と高くなってきています。建林課長もおっしゃっていましたが、学校全体としてこどもたちのよいところを認めていこう、励ましていこう、伸ばしていこうということで、教員のこどもたちへの関わり方が、ここ数年変わってきたということもあると思います。おとなもそうですが、中身の無いことで褒められてもうれしくないと思いますので、こどもたちが実際に活躍する場で、達成感を味わうからこそ、有用感や肯定感が生まれると思います。そこで、本市としては、社会の力をお借りしながら、スクールESDで、自分たちで考えたことを行動し、それを地域の方々に認めてもらう場面を創り出しているということです。松原中学校が野菜を育て、市役所で販売しましたが、生徒会のこどもが中心となって動いており、ESDと特別活動は少しずつ関わりながら好循環を生み出していると思います。
教育部理事(学校教育担当)	他に御意見はいかがでしょうか。
森委員	中学校の取組の紹介やこどもサミットでのこどもが挙げた課題、教職員のこどもまんなかに対する理解が足りないなどの課題も挙げていただきましたが、この4月からこどもまんなかの学校づくりを進めていて、子どもの権利条約やこどもまんなか社会等の研修も始める中で、今現在、こども自身の意識が変わってきたとか、教職員も以前より対話を重視するようになったとか、早いところであれば、年間計画に取り入れているとか、現在の状況を知りたいです。全く響いていないのか、少しずつでも変わってきているのか、教職員、こどもともにいかがでしょうか。
児童生徒支援課長	結論から言いますと、少しずつ変わってきていると思います。こど

もサミットの中でこどもたちの話を聞いていると、自分たちがやろうとしていることを、だんだん仲間を増やしていって、少しずつわかっていってもら取組ができるようになってきたと言っていましたし、教職員につきましても、若い先生はこどもと年が近いことあり、こどもの意見をよく聞いて、そのことを他の先生にわかってもらおうとしています。例えば、学年主任や教頭に話をして、こどもはこんな願いを持っていて、こんなことをやりたいと思っていて、そのためにこんなことをしてほしい、大人の力を貸してほしいと伝えたりしています。少しずつ変わってきていると思います。今年の教育研究所で行っている夏季研修講座でも立命館高校の先生に来ていただき、ルールメイキングの話をしていただきました。そこでも、市内の小中学校の教員が50名強来ておりまして、皆さん熱心に聞いておられましたし、感想を見せていただきましたが、これは必要だと主張している方がたくさんいらっしゃったので、少しずつ変わってきたと思います。ただ、全員かと言われるとなかなかですので、こどももおとなもまだまだかなと思っています。

教育部理事(学校教育担当)

その他いかがでしょうか。

小辻委員

ありがとうございました。

まず、こどもとおとながお互いに、両方ともが社会の中心になるということを、わかりやすくまとめていただきました。こどもまんなかはおとながまんなかではないという意味ではなく、すべてのひとがまんなかであるということをしっかりと理解していただくことが重要なかなと思いました。そこで1つ質問ですが、こどもとおとなが関係なく学校を創りあげの中で、職員会議で提案が通らないという内容が出てきました。職員会議は、学校教育法の施行規則第48条の中で、基本的に校長の職務円滑化を目的にしていると思います。正しく読むなら、校長先生が提案を通さないというように私の解釈では読めます。ただ、ここでは、校長先生がではなく、職員会議がとなっていて、職員会議が教職員の意思決定の場と勘違いされていることが続いているように思うのですが、現状どうなのでしょう。

児童生徒支援課長

ありがとうございます。職員会議はおっしゃるように、意思決定機関ではありません。校長が主催し、職員の意見を聞きながら、決定することが正しいです。ただ、こどもたちの意見が職員会議で通らな

	いというのは、職員会議というより、先生方にわかっていただけないというイメージなのかなと思っています。実際に職員会議で案を通すというのは、こどもたちがその場にいてということは少なかったのですが、職員会議の場にこどもが参加して、意見を述べるということをは始めている学校もあります。こどもも教員も、そこが意思決定の場であるように捉えているように感じる部分もありますので、そこは改めていきたいと思います。
教育部理事(学校教育担当)	他はいかがでしょうか。
市長	生徒の意見のなかで、実現できない理由・課題として、全体に言えるのは経費がかかるということ。やりたいけれども経費の面でできなかったと。そこは障害みたいになっていくと、こどもたちにとってはもどかしい部分もあると思いますが、そのあたりは校長先生が最終決定権を持っているとして、手立てとして、先ほど生徒会費を使うというような話もありましたが、特別に必要性を認めて経費を決定する、やり方を変えて経費削減をする、購入せず、他の学校や場所から借りてくると言うような形で、先生方が動いたりということについて、今まで工夫はあったのでしょうか。経費がないからやめるというようにも取れますが、これからどのように工夫をしていくつもりなのか。
児童生徒支援課長	今までも、こどもたちがやりたいことに対して、教員も一緒に話を聞きながらしています。道具を借りたりというのは中学校間で既に行っており、どこにどんなものがあるというのも把握しています。例えば新堂中学校で道德劇をするときに、照明が足りず、他の学校から借りてきていることはあります。運動会に関する道具も借りられるものは借りています。ただ、既存のものだけでやっているのも難しい面もあります。新しいアイデアがでたときに、どこにもないということもありますので、そういったものについては、今後経費の面では助けただけるとありがたいです。
教育長	保護者の皆さんから出していただいている分で、生徒会費はどれぐらいの額になるのでしょうか。
児童生徒支援課長	全校調べたわけではありませんが、月に 100 円～200 円の間ぐら

	いで 10 ヶ月程度です。年間で一人 2,000 円ぐらいだと思います。
教育長	それで、生徒会にかかる様々な事業に振り分けられるということですね。
児童生徒支援課長	はい。委員会活動やそれぞれの行事に使ったりということになります。
教育長	その事業を形を変えるとか、スクラップアンドビルドという話もありましたが、それをしないと時間もお金も生まれてこないということですね。
児童生徒支援課長	おっしゃるとおりです。
市長	生徒会の予算はどんな形で最終決定をして予算を執行していくのでしょうか。そこにも、スクラップアンドビルドの話もありましたが、こどもの意見も反映されてきたのでしょうか。
児童生徒支援課課長補佐	児童生徒支援課の高橋です。さきほどの中学校の生徒会費の運営ですが、毎月学年諸費というものが、多くの学校で引き落としされており、生徒会費は 100 円前後です。あまりこれを値上げすることは難しいので、どちらかという、現状維持か下がっていく方向です。その中、生徒会費については生徒会費という名目で生徒会担当に計上されます。そこで、生徒会執行部を中心に、生活委員会や体育委員会などの委員会活動にも割り振られます。経費のどこにいくらというのは、多くが前年踏襲で、前年これだけかかったので、今年はこの金額でという形になります。生徒総会で予算、決算で決議されていますが、そこに生徒の意見が多く反映されているかと言われると学校によるところがあります。
教育部理事(学校教育担当)	今、経費の分についての中学校の実情について説明いただきました。一旦、別の質問があればいかがでしょうか。
小辻委員	スライドの 15 ページの「わたしたちが創りあげる学校に向けて」の教職員が感じている課題の 5 点目です。「自分たちで学校を変えてきた経験が少ないので、取り組みたいことを実現させるための道筋

がわからない」と記載されています。子どもだけではなく、おとなもわかっていないことが問題なのかなと思っています。学校を変えた経験だけではなく、社会で何かを変えてきた経験がないのかなと思います。今の子どもたちの方は変えられると思っているわけですが、おとなたちほど、ESDを受けて育ってきた世代ではありませんので、そんなことできないという中で生きてきたと思います。そこで、思うことですが、先生方に向けて、変えるための経験をどのようにつんでもらうのか、もしくは、これまでに変えてきた先生方がいるなら、どのように経験をつまれて、指導につなげたのか、よい例があれば教えていただきたいです。

児童生徒支援課長

おっしゃるように、教職員の年代では、自分たちで変えてきた経験が少ないというのはその通りだと思います。そこに力をつけていくためには、様々な実践に触れていかないといけないですし、実際に行っている先生の話聞くことが大切だと思います。そういった意味では教職員の研修というのは、ポイントになるかなと思います。今年度も教育研究所で行いましたが、興味のある方がいらっしゃることになりますので、それをさらに学校の中で広めていくということが大切だと思います。それをしていくためには、学校の中でも、進めていけるような研修をこちらから提示したり、進んで来ていただけるように少しずつ変えていかないといけないかなと思います。あまり、強引に進めていくこともよくないと思いますし、先生方ができることから始めていただくことがポイントだと思います。少しずつ研修等をしていけるように考えていきたいと思っています。

小辻委員

研修は大事だと思いますが、草津市でも様々なまちづくり活動に関わっている方がおられ、素晴らしい現場はたくさんあると思います。習うだけではなにかできるわけではないので、先生方に自分の興味のあるようなまちづくりの現場を知っていただくための情報を与える機会をつくっていただき、実際に関わっていただいたりという機会を増やしていただければ、変わってくるのではないかと思います。教員ではないかもしれませんが、素晴らしい先生方が、まちづくりやNPOを含めてたくさんいらっしゃると思いますので、よろしければ研修＋αで教員の方々に届けていただいて、実践の中で経験を積んでいただけるよう、御検討いただければと思います。

教育部理事(学校教育担当)

ありがとうございます。今、一つの示唆を与えていただいたのかなと思いますが、教職員に情報を与えることは教育委員会の役割の一つかなと思います。御質問もあればお聞きしたいと思いますが、最後のこどもまんなかの学校づくりのためにおとなが支援できることとはということで、小辻委員からも御意見いただきましたが、他にも御意見があればお願いしたいと思います。

森委員

こどもたちが中学校を卒業するときに一番何をいうかという、学校祭や修学旅行、自分たちが苦勞して仲間と乗り越えてきて成功した体験です。おとなになにができるかという、まず、非常に中学生が忙しくてなかなか難しいですが、話し合う時間の何か手立てを打つことです。こどもまんなかの学校づくりで話し合う時間が必要だと思うのなら、工夫をしてこの時間は話し合う時間というように、少し手立てを入れてあげると、例えば、生徒が感じている課題の中に、生徒同士でもうまくつながれないと記載されていますが、それではどうするのかということを話し合いをして課題を見付けていけないといけない、お金がないのでどうしていくのか、おとなと話を、どのように解決をしていくのかを、学校の先生と対立するのではなく、対話を通して、持っていけないといけない。一方で、おとなとしては、こどもが安心して、意見をいえる風土がないとまず始まらない。そのような環境風土を教職員が整えて、話し合いをして、無条件で次からで次にできるものではないので、この条件でするんだよと。こどもたちが失敗しながらも自分たちの力で仲間と一緒に乗り越えることができれば、自信になり、次また挑戦しようという気持ちになると思います。

教育部理事(学校教育担当)

教職員の立場からできる支援、時間の確保でいうと教育課程の編成をどうしていくのか、様々な行事の見直しやスクラップアンドビルドに繋がっていくのかなと思います。何よりもこどもが安心して自由に意見を言える環境風土づくりは教職員の大きな使命でもあり役割でもありますし、教職員ができる支援の一つかなと感じました。

他はいかがでしょうか。

我孫子委員

やらされるよりも、自分からやる方が力も出るし、アイデアも出てくるし、力もつくし、学びになるし、自信にもなると思います。どんなことであっても間違いないのかなと思います。こどもから出てくる意見や話し合いの中で出てくるものを進めてあげたいというのは、先生方

も思っているだろうなと感じます。こどもたちからも先生方からも出てくる時間とお金の話は、森委員がおっしゃったように、まずは工夫するという話になると思いますが、これだけの予算でやりなさいというよりは、社会に出た時に、自分たちでお金を稼ぐか、自分たちの思いを伝えてお金を集めるかというところでいろいろ進めていくと思いますが、計画を立てて自分たちの思いを伝えて、どれぐらいのお金が必要かを決めてやりたいことを進めることを、実際に中学生にもやってもらうことが大事なのかなと感じました。それがたとえお金が集まっても集まらなくても、一つの経験になると思いますし、では次にどんな工夫をしていけばよいのかをまわしていったら、そこをサポートできればよいのかなと思いました。

教育部理事(学校教育担当)

おとなのサポートの考え方として与えるだけではなく、こどもたちが自分たちで考え、計画し実行していくための意見表明をしっかりと受けとめたうえで、できる支援を考えていくことが必要なのではと捉えさせていただきました。

そろそろ時間の方が来ております。活発な御議論をいただきありがとうございます。集約的なまとめを市長と教育長からお願いします。市長からお願いします。

市長

課題については、スライドの 14 ページ、15 ページに記載されている通りだと思います。いかにこれらを解決していくのか、一気にできなくても少しずつでも、それぞれについて解決していくことが、こどもまんなかが創りあげる学校になるのかなと思います。個々の課題については、御意見がそれぞれございましたので、解決策を今度は教育委員会なりに示していただき、論議もしていただき、実現につなげていっていただきたいと思います。市長部局の方でサポートすべきものもあると思いますので、そういったものについては、出させていただくことでよりよい草津市のこどもまんなかの学校ができると思います。

教育部理事(学校教育担当)

ありがとうございました。
続いて教育長お願いします。

教育長

確かに課題がよく見えてきました。大分前ですが、私の学生時代と比べてこどもたちは意見が言えて、先生方もそれを実現しようとい

う環境が出てきたのかなと、社会の変わり方も含めて、大分できてきたのかなと思っています。実は生徒指導も大きく定義が変わっています。今までの生徒指導は、問題行動を起こした生徒の対応という認識でしたが、令和4年からは、大きく変わって、子どもたちの発達や成長を促す、発達を支えるという生徒指導に舵をきっていかうようになっており、そんな予防的な生徒指導といえますか、子どもたちの発達を支持していく生徒指導になってきましたので、実際に問題行動が表面的に起きているケースは少なくなってきましたし、そのように舵がきられていくなかで、どのような発達を支えていくのかを、学校の先生方の中で議論をしていただく必要があるのかなと。先ほど委員さんからの御意見にもありましたが、単にお金をつけて、時間を作って子どもたちに任せてしまうということではないとのことでした。自分たちの学校の子どもたちをどのように支えていくのか、学校によって違いもあると思いますので、まずは先生方が共通意識を持っていただき、土台をしっかりしていく。土台がしっかりしていないと子どもたちの活動も安定していかないと思いますので。かといって、先生たちの意識が変わるのを待っていると進みません。子どもたちはやる気もありますので、両方で進めていかないといけないのかなと思っています。様々な考え方や価値観をもつ子どもたちがたくさんいる中で、どのような納得感といえますか、皆がそれだったらいいねというものを求めていくことが、これから社会に出る中で必要な力だと思いますし、何のために進めていくのかという目的をしっかり抑えつつ、子どもたちの主体性を発揮できるように期待していきたいと思います。市長からも解決策を考えて教育委員会で議論をという御意見をいただきました。本日皆さまからの御意見もいただきましたので、これから具体的に課題をどのように解決していくのかということの一つひとつ丁寧に議論をして進めていきたいと思います。市長の方もどうぞよろしくお願いいたします。まとめというより、決意表明のようになってしまいましたが、子どもたちが主体的に取り組を進めて、学校に行ってみたいな、行ってよかったなと思える魅力ある学校づくりを進めていきたいと思っています。

教育部理事(学校教育担当)

ありがとうございました。市長と教育長にまとめていただき、主体的なこどもの取組への支援について、共通認識を持ちえたのではないかと考えます。皆さまから頂いた御意見・御提案を踏まえながら、これからの事業の検討につなげてまいりたいと思います。

それでは、第 1 部につきましては、以上で終了とさせていただきます。このあと、第 2 部の準備をさせていただきますので、準備が整うまでの時間、休憩とさせていただきます。第1部ありがとうございました。

教育部長

それでは、再開させていただきます。教育委員会事務局の高岡でございます。第 2 部は私の方で進行させていただきます。議題が、「地域版ESDの推進について」でございます。まずは、担当課であります生涯学習課から説明を行います。今日は、今回のモデル事業を主催され、実施いただいた老上学区のまちづくり協議会の皆さま、コーディネーター、サポーターの方々にも御出席いただいております。それでは、よろしくお願いします。

生涯学習課長

生涯学習課の山田でございます。

今日は「地域版 ESD の推進について」として、本市がこれまで積み重ねてきた「地域協働合校」の取組を基盤に、今後の地域における地域協働合校のありかたとして、御説明させていただきます。

説明の流れといたしましては、「地域協働合校推進事業について」、「地域協働合校推進事業における新たな展開に向けた取組」「今後の地域版ESDの推進に向けて」の 3 点の順です。

まず、1点目の「地域協働合校推進事業について」です。地域協働合校推進事業は、本市では平成 10 年度から学校・家庭・地域の教育資源を活かしながら、こどもと大人が協働で学ぶことをめざすもので、今年度で 28 年目を迎えます。学校では稲刈り体験や図書館ボランティア、地域では草津川探検や防災キャンプなど、地域資源を活かした体験活動を重ね、地域に開かれた学校づくり、地域でこどもが育つまちづくりの両面を担っています。

この「地域協働合校推進事業」実施の背景といたしましては、急速な人口増加に伴う地域の連帯感の希薄化、携帯電話などメディア環境の変化やこどもの過密スケジュールによる、こどもの自主性・社会性の未熟化、体験活動の不足、生涯学習の実施において市民の学習成果を社会に活かす意識や仕組みの不足が挙げられ、これらを受け、平成 10 年度から地域協働合校を展開してまいりました。「子供の体験活動の実態に関する調査」結果では、体験活動が豊富なこどもほど将来の人間関係能力が高い傾向が明らかになっていること、また、地域行事に参加することでコミュニケーションスキ

ルが高まることも示されています。社会性を育むうえで地域協働合校は体験活動を担う重要な場となっています。一方で、「青少年の体験活動等に関する意識調査」では、体験活動の参加には、保護者の負担や情報不足などが要因で、参加率は年々低下傾向にあり、特に「こどもが関心を示さない」という回答も増えており、体験活動をめぐる環境が大きな課題となっています。

この資料は「市内における近年の地域協働合校事業数・参加人数」です。小中学校では新型コロナウイルス感染症以降に落ち込んだものの、近年、事業数・参加人数ともに回復基調にあります。しかし、地域における地域協働合校は、事業数自体は戻ってきているものの、参加者数は依然として新型コロナウイルス感染症拡大前には戻っていない現状にあります。

このことから、これまでの地域協働合校における成果と課題といたしまして、成果としては、自然体験や地域活動を通じた社会性の育成、異世代間交流、地域資源の再発見と誇りの醸成が挙げられます。一方、課題として、地域における地域協働合校において、参加者数の回復が若干遅れていること、大人主導で進められる事業が多いこと、協力者の高齢化や固定化が進んでいることが挙げられます。そこで、学校および地域の方で新たな地域協働合校の取組を行っています。

2 点目の「地域協働合校推進事業における新たな展開に向けた取組」です。学校では令和 4 年度から「スクールESDくさつ推進事業」を開始し、令和 6 年度から市内全小中学校で展開しています。これは従来の地域協働合校の「気づく・調べる・まとめる」といった一部事業を発展させ、図のピンク部分の「提案・行動・発信」に展開することで、地域課題を体験的に学び、主体的に解決に取り組む仕組みを導入しました。また、さらに多世代と協働することで社会参画や貢献を実際に経験し、この「学びのサイクル」を通じて、こどもたちの「地域社会の一員としての意識と行動力」を育んでいます。具体例として、昨年度の常盤小学校 4 年生の取組を紹介します。こどもたちは地域の高齢化に気づき、地域の住民の声を聴きながらお年寄りを元気にする体操を考案し、健康イベントを実施しました。実際に、実践を通じて人とのつながりの大切さを学び、喜ぶ姿を見て、自分たちも社会に役立てると実感することができました。また、ここから自己有用感の高まりは、こどもたちが持続可能な社会の担い手となるために大切だと考えています。この「スクールESDくさつ推進事業」

は、全国学力・学習調査において、「自ら課題を立てて発表する」、「地域をよくするために何かしてみたいと考える」児童生徒の割合が上昇傾向にあり、主体性・探究性・社会性が向上傾向にあり、「地域社会の一員としての意識」が向上傾向にあることがうかがえます。ついで、スクールESDの考え方を活用する事で先に述べた地域協働合校の課題解決にも通じる効果があると考えております。

そこで、その効果として、課題として挙げていた「大人主導の事業を展開」をこども主体で事業を検討・企画することで、大人主導からの転換を図ることで、こどもの意見を取り入れ「楽しい」と思える事業の実施をすることで、参加者の増加に繋げること、また、こどもが事業に参加することで、大学生や地域の大人を巻き込む効果に繋がるなど課題として挙げていた「参加者数の減少」や「協力者の減少や固定化」といった、従来の課題解決に波及効果が期待できると考えております。

ここからは、地域における展開について御説明いたします。本市では、令和6年度、7年度の社会教育委員会会議において、「地域の地域協働合校のあり方」について議論を進めております。その中で重要な視点となったのが、「地域版 ESD」という考え方です。従来の地域協働合校は、地域行事や防災活動などの体験や交流、図で言うところのオレンジ色の部分となりますが、そこを中心に据え、これまでの積み重ねは大きな成果を上げております。しかし一方で、大人主導にとどまる場面も多く、こどもの主体的な関わりをどう引き出すかが課題でした。そこで、「地域版 ESD」では、既存事業の一部を発展させる形で、こどもが自ら意見を出し、参画し、行動するプロセスを意識的に取り入れてまいります。体験に「自分の考え」を乗せて実践につなげることで、単なる参加者から一歩進んで、「自ら考え行動できる人材の育成」に取り組むことで、「地域の担い手づくり」、「持続可能な地域づくり」を目指しております。

今年度、地域版 ESD のモデル事業として老上学区で実施するにあたり、社会教育委員会会議で整理した5つの視点を基盤に展開しました。1つ目は、こどもの「やりたい」を尊重し、「自ら考え、行動する力を育む」こどもの主体的な学びの促進、2つ目は、地域のつながりと学びの広がりをつくるため多様な世代が協力する仕組みづくり、3つ目は、地域資源や人材をつなぐコーディネーターの活用、4つ目は、大人が参加しやすい環境づくり、5つ目は、活動の意味や楽しさを伝えるなど情報の共有と発信の強化です。これらを既存事

業に足すことで、無理なくこどもの参画と大人の参加を広げ、地域に学びの場を築く取組といたしました。

次に、具体的なモデル事業として、老上学区で8月30日に開催した、防災フェスについて御説明いたします。この取組では、小学生6名と中学生2名が実行委員となり、8名のサポーターと3名のコーディネーターが伴走する形で実行委員会を5回開催しました。この事業の特徴は、大人が企画を主導するのではなく、こどもたち自身が中心となり、防災に関する企画を立案し、検討を重ね、当日の実施まで主体的に取り組んだ点にあります。取組のプロセスは大きく5段階に分けられます。まず、「体験・交流」を通じて防災に関する知識や技術を学び、次に「気づく・知る」の段階で地域の防災課題を自分ごととして捉えました。この部分が、図中の緑色の従来の地域協働合校の部分に該当します。続いて、「こどもの意見表明・参画」の段階で、こどもたちが自らアイデアを出し、「こどもと大人の共学び」の段階で、大人による経験や知恵を取り入れながら企画をブラッシュアップしました。そして最後に、「行動」の段階において、防災フェスのステージ企画を実施し、地域へ防災意識を発信しました。これが図中の赤色の今回発展させた部分となります。この過程を通じて、こどもたちには主体性や達成感、地域とのつながりを実感することができました。一方、大人にとっても、こどもたちから新しい学びを得る機会となりました。地域版 ESD は単なるイベントにとどまるものではなく、次世代の担い手を育てる「学びと実践の循環」を地域に根付かせる重要な取組であると考えています。

3点目の今後の「地域版 ESD」推進に向けてです。

今回、このモデル事業を通じて、参加したこども実行委員の方々に事業実施のアンケートやヒアリングを行いました。参加するきっかけとして「企画ができるのが面白そう」といった意見や実際に参加して「自分が考えた企画が採用されたことがうれしかった」などの主体性や自己有用感が得られたことが示されました。また、コーディネーターやサポーターとともに学ぶことにより、「多くの参加者と取り組むことで知らないことを知れた」、「他の参加者や大学生と仲良くなれた」など大人とこどもの共学びや地域でのつながりができたこと、今後の自らの行動として、「また参加したい」、「自分がリーダーとして地域で活動したい」といった地域貢献に関する意欲も芽生えていました。また、中学生からは、実行委員会に参加したかったが、部活等で実行委員会を欠席することがあったという参加に対する意見が

ありました。

本日は、モデル事業に御協力いただきました老上まちづくり協議会の山本会長、日下部事務局長がいらっしやっています。モデル事業の成果や課題等をお話しいただきたいと思います。

山本老上まちづくり協議会会長

老上まちづくり協議会の山本でございます。どうぞよろしくお願いいたします。今御説明いただきましたモデル事業についてでございますが、老上学区では様々な活動を行っておりますが、その中でも、防災フェスを行いまして、いろいろと皆さんに御協力いただきました。時間の関係上全てをお話することは難しいのですが、まちづくり協議会としては去年も実施した事業ですが、今年は、こども主体で、こども実行委員会をいれて実施しました。主体的に関わる姿といいますか、大人の常識や経験というこだわりなく、こどもたちの意見を取り入れ、それに基づいて我々が協力をするという形でした。また、コーディネーターがおられますが、大変お世話になりました。まず、話し合い、どうしてこうかと話を持っていきました。地域は年配のものが多く、コーディネーターは若い方で、年齢は様々でしたが、一緒に意見を取り入れ、こどもがうまくついていけるようにしながら、小学生、中学生も一緒に、我々もサポートしながら、協力させてもらいました。心配していたのは、こどもが集まるかなという募集の点でした。老上学区はこどもがたくさんおられますが、その一部ですが手を挙げていただきました。その方々を主に、一緒に活動しようかということで、様々な企画に入っていただきました。今までは大人目線で、われわれの考えで事業をしていましたが、これからは、未来の大人であるこどもたちにお世話にならないといけません。老上学区はマンションも多く、開発もしており、人が増えて小学生は 900 人ぐらいいます。様々なこどもたちと一緒に事業を行っています。先ほど、地域協働合校の話が出ましたが、老上学区は都市と田舎で、田んぼがあります。青少年でいうと、育成、わくわくプラザがありますが、大人もこどもも田んぼに行ったり、畑に行ったり、安土に行ったり、三上山に登山に行ったり、琵琶湖で魚つかみをしたりと、様々な企画をしております。今回は、防災についてのお話ですが、今後もうろろと考えて、まちづくり協議会としてサポートしていきたいと思っております。

日下部老上まちづくり協議会事務局長

老上まちづくり協議会事務局長の日下部です。今日はありがとう

ございます。最初はこどもたちが集まってくれるか不安でしたが、8名のこどもたちが集まるたびに楽しそうにわくわくしていました。最後反省会では、次はいつするのという声が聞こえてきました。その時に、そのこどもたちの気持ちをどのように次に活かしていくのが今の一番の課題だと思いました。まちづくり協議会でも様々な事業を行っていますが、その中で、昨年初めて行った防災フェスという事業に、今回こどもたちに関わっていただきました。まちづくり協議会の事業の中で、こどもたちがどのように一緒にしていけるかというのは今後の課題だと思います。さらに、ここに地域のコーディネーターやサポーターの方にたくさん関わっていただき、ラッキーだったなと思います。いつもそうできるかは未知数ですので、今回は成果がありました。毎回同じようなやり方をするとどこかでマンネリ化してしまいます。そういったことを考えると、今後まちづくり協議会の事業の中でどう活かしていくか、こどもたちも一緒にどうやっていくか、課題はたくさんありますけれども、それを考えていかなければと思っています。今回はありがとうございました。

生涯学習課長

ありがとうございました。次にコーディネーターとして関わってくださった、大学生でもあります渡井さんをお願いしたいと思います。

渡井コーディネーター

大学3回生の渡井です。私は老上学区出身で老上学区で生活しています。コーディネーターとして、この事業には実行委員会全体の司会進行を務めさせていただきました。このコーディネーターをするにあたって、生涯学習課の方と会議もしたうえで、2つ目標を立てました。1つ目はこどものアイデアを最大限尊重すること、2つ目は、こどもたちに地域の課題に興味を持ってもらいこれからも参画したいと思ってもらう機会にすることです。実行委員会は5回の準備期間と当日の計6回でどちらの目標も達成できたのかなと思っています。1つ目の「こどものアイデアを尊重する」は、最初と2回目で、こどもたちにどんなことをしたいのかという意見を出してもらったのですが、こどもたちも緊張していて、あまり意見が出ませんでした。こちらから言うのもどうかと思って、そのバランスがとても難しかった記憶があります。ただ、会を経るごとに、仲良くなって、だんだん心を開いてくれて、皆さん、活発になっていったので、最初に仲が良くなるように、アイスブレイクなどを行ってから、意見を集めるような形にできたら、もっとスムーズにいろいろなアイデアがでたのかなと思っています。

います。2 つ目の「地域の課題に興味を持ってもらう」という点については、最後のこどもたちのアンケートでは、「また来年もやりたい」、「今度は違う友達も連れてきて一緒にやりたい」という意見があったので、今回行ったことが、今度は、他のこどもたちも巻き込んで、その輪が広がっていったらいいなと思っています。

生涯学習課長

ありがとうございました。最後にサポーターとして、当モデル事業に参画いただいた、大学院生の岡田さんをお願いしたいと思います。

岡田サポーター

今回、サポーターとして参加いたしました大学院生の岡田です。
今回の事業については、まちづくり協議会さんや生涯学習課さんや、コーディネーターの渡井さんとサポートするという形で、8 名ぐらいの学生等でサポーターとして関わり、その代表としてお話をさせていただきます。まず、活動に参加するにあたって、草津市の社会教育委員の方から、「こんなイベントがあるから、防災研究室の岡田君、手伝ってみない?」と言われまして、その方は大学の職員もされていたので、知っている方からの声掛けだったので、参加のハードルが下がって、やってみようと思いました。そこから、私から研究室の仲間に広げていくことで、参加してもらえたという経緯があります。気心知れた方から紹介してもらおうと参加のハードルが下がると思います。もう 1 点、活動で感じた点が、コーディネーターの渡井さんもおっしゃっていましたが、こどもの主体性を大事にする、こどもの意見を尊重するということで、私は、大学で研究をしているので、防災に関する知識は小学生・中学生のこどもたちよりもあります。その中で、こんなことをしたいといったときに、全てを教えてしまうと大人主体の今までと同じ活動になってしまうので、こどもが自分で考えてアイデアを出す考え方をどこまで導けるのか、どこまで意見をいついていいのかというところが、難しいポイントでもあり、私が成長できたポイントでもあると思います。もう1つ課題として感じたことは、今回、十数名の大学生などの大人が関わる中で、コーディネーターとサポーター、まちづくり協議会など分かれてはいましたが、関わり方があいまいになってしまったと思います。私もコーディネーター的なかわり方をしてしまったかもしれませんし、サポーターと事業を推進して引っ張っていく方の線引きがしっかりしていくといいかなと感じています。

生涯学習課長

皆さんありがとうございました。

「地域版ESD」は、学びを通じた「担い手づくり」と「地域づくり」の両輪をめざすものです。今回の老上学区でのモデル事業では先ほどもまちづくり協議会、コーディネーター、サポーターの皆さまからお話がありました通り、多くの成果と今後の課題が見えてきたところがございます。本日の会議では、「地域版ESD」を進めていく上での論点を明らかにしたく、御意見を賜りたいと存じます。

以上で説明を終わります。よろしくお願いします。

教育部長

ありがとうございます。ただいまの説明の内容を踏まえていただきまして、意見交換をしていただきたいと思います。老上学区まちづくり協議会やコーディネーター、サポーターの皆さんからの御発言もございましたので、皆さんからの御発言に対する質問も含めまして、まずは御質問がございましたらお願いいたします。

市長

いくつかお聞きしますが、こども実行委員会を6回されたということですが、実行委員会のメンバーのこどもたちはどのように選んだのでしょうか。手挙げ方式だと思いますが、学校との関わり方はどうだったのでしょうか。岡田さんの方から、コーディネーターとサポーターの役割が難しかったとのことでしたが、コーディネーターとサポーターの役割をどのように切り分けたらよいと、御経験からお考えでしょうか。渡井さんと岡田さんにお聞きしたいと思います。

教育部長

まず、学校の関わり方からお願いしたいと思います。

生涯学習課長

こども実行委員会と学校との関わり方について説明させていただきます。老上小学校と老上中学校に募集をさせていただき、手上げ方式で応募いただいたということになります。

市長

中学校にも声掛けをしたのですか。

生涯学習課長

はい。小学生が6名、中学生が2名です。

市長

実際の防災フェスにも8名が参加したのですか。

生涯学習課長	はい。参加いただきました。こども実行委員会自体は、合計 8 名で組織されておりまして、小学生 6 名は老上小学校、中学生 2 名は老上中学校 1 年生となっております。
教育部長	補足があればお願いします。
日下部老上まちづくり協議会事務局長	小学校と中学校の校長先生には協力をお願いをいたしました。小学校では Sigfy を使って、全児童の保護者に内容が伝わるように、告知しました。
教育部長	ありがとうございます。では、コーディネーターとサポーターの役割についてはいかがでしょうか。
岡田サポーター	今回、私がサポーターとして参加しましたが、実行委員会全 5 回のうち、3 回目、4 回目、5 回目に出席させていただきました。1 回目と 2 回目に出席していなかったので前提条件がわかっていない中で、飛び込んだ形になるのですが、実際に 8 月 30 日の防災フェスの本番当日まで、コーディネーターとサポーターという役割分担がされていること自体も、あまり認識していませんでした。今後、サポーターとコーディネーターをどのように分けていくかのアイデアですが、個人的なものになりますが、今回、社会教育委員の方から教えていただいて、信頼をしていた、心を許していた方だったので、そのような方から依頼を受けたというのも影響がありましたので、ロールモデルのような方が、コーディネーターになるということも大事なのかなと思いました。草津市でしたら市長のような、知っておられる方のように、そんな方がコーディネーターに立つと、周りへの波及効果や見せ方という意味では重要なポイントになるのかなと思います。それを周りのいろいろな方々がサポートすると。一人でなくてもいいかもしれませんが、コーディネーターが柱になっていただけたら、そこから進んでいけるのかなと思いました。勝手な見解ですがそう思いました。
渡井コーディネーター	私は、コーディネーターとサポーターの役割分担をしなくてもいいのかなと思っています。スタッフをまとめる役として誰か 1 人はいないと、次に何をするか、全体をどうするかが考えにくいのかなとは思いますが。今回のコーディネーターは、私が防災の学生団体をしてい

山本老上まちづくり協議会会長

て、そこから 3 名が入ってくれて、同じチームで気の知れた仲なので、相談しやすかったです。サポーターの方は初対面の方々ばかりでどこまでお願いしてよいのか、どのように話してよいのか迷ったので、最初から一人リーダーを置き、後は皆が同じ立場の方が、初対面だろうが顔見知りだろうが、話は同じようにしやすいのかなと思います。

少し補足ですが、こども実行委員会以外に SOS 委員会というものがあります。その中の男性 2 人に、人が足らずに急遽入っていただきました。練習もうまくできていなかったのですが、皆さんと一緒にやっていただけて上手くいきました。我々は、見ただけでしたが、上手くいって感心しました。することに意義があると思います。始めてこのようなことをしたので、来年も実施することになるなら、サポーターの方がおっしゃったように充実したものにしていきたいなと思っています。

教育部長

他に御質問はいかがでしょうか。

我孫子委員

今回、コーディネーターさんやサポーターさんといった大人の方がたくさん関わって、サポートすることで、こどもたちが主体的にできていたのかな、上手くいっていったのかなと思います。これを学校ではなかなか時間が限られている中で、地域でこういったことができるのは素晴らしいな、進めてほしいなと思います。ただ、今回、社会教育委員のお声がけがあって、コーディネーターさんやサポーターさんが確保できたということがあると思いますが、今後、いろいろなところで地域版ESDを進めていくために、関わってくれる大人をどう確保していくのかがポイントになると思いますが、どのように見つけていくのかについて、何か案はありますか。

教育部長

地域版ESDを進めていくために、大人の協力者をどのようにして見つけていくのかとの御質問です。

生涯学習課長

今回、コーディネーターやサポーターを集めるにあたっては、特にコーディネーターについては、最初からスキルを持っている方ではなく、必要以上に口出しをせずに、こどもの意見をいかに引き出すか、主体性を出してくれるかが大事だと思っています。地域の多く

の方々がおられる中で、コーディネーターには資格はいらないこと、こどもと接してくれることに、こう言ったことが必要なんだと認識してもらったうえで参画してもらうことが大事だと思いますし、サポーターの募集についても、こどもが主体になった事業のなかで、こどもができないことに対してサポートしてくれる方々を募集しました。先ほども申し上げましたが、学校の仕組みや地域の全戸配布を活用させてもらい、大学や光泉高校などにお声掛けさせてもらう中で、高校生、大学生、地域の方が参加してくださいました。多くの方々に募集していきたいと思います。実際に集まっていただけましたので、いかに理解をしてもらえるか、ハードルが高くないということを認識してもらえるかだと思います。

教育部長

他はいかがでしょうか。

小辻委員

まず、コーディネーターとサポーターのお二人に確認がしたいのですが、過去のこどもの時代にアクティブラーニングなどを受けたことがあるのでしょうか。または、これまでのこどものときの経験がどのように活きたのでしょうか。

渡井コーディネーター

小学校のときより、中学校、高校の経験が活きたと思います。中学校、高校と生徒会に所属していて、副会長などをやらせてもらいましたが、そのときに、体育祭などで、生徒会で1つ企画して全校生徒で競技をつくるというプロジェクトがありました。自分たちで意見を出して、それを先生方に打診して、了承してもらえるように少しずつ調整しました。1年生から3年生までみんなが一緒に楽しめるような競技を作った経験は盛り上がるよい企画になったと思います。そのときに、自分はどのように考えていたのか、中学校2年か3年でしたが、小学生だとどのような道筋を示してあげたらいいのか、その時や高校以降に自分が経験したプロセスは参考になったかなと思います。

岡田サポーター

アクティブラーニングについては、私は地元が草津市ではないのでおそらく、経験していないと思いますが、今回、役に立ったと思ったことは、7月に玉川小学校で1泊2日の防災訓練を行いまして、議員さんなども関わって実行委員長としてやらせていただいたときに、こどもと関わったのでその経験です。

教育部長

その他はいかがでしょうか。

森委員

素晴らしい取組で圧倒されました。ほとんどの地域は、課題にある「団体を含む高齢化が進んでおり、地域活動における協力者が減少・固定化している」と戦っていると思います。これまでだと地域の担い手になってくれるはずの年齢の方が、社会が変わって、まだ働いています。高齢者が頑張らないと、次にバトンが渡せないのも、地域は担い手がいなくて困っています。今日の発表をお聞きして、生涯学習課の方がおっしゃるように、発信すること、まず、募集をすることで、それが響いて来てくださる方がいると学びました。小学生が「次いつやるの」ということは非常にいい経験になったからだと思います。こどもが主体的に参画していく「地域版ESD」に何が一番大切だと経験して思われましたか。私は、コーディネーターやサポーターのように、年齢の高い地域の方との間にワンクッション置くことで、こどもが話しやすかったり、相談しやすかったのではないかなと想像はできるのですが、何がこれから、こどもが参加し続けるために大切だと思われますか。

山本老上まちづくり協議会会長

私は老上小学校と老上中学校のコミュニティ・スクールのメンバーに入っています。小学校については、スクールESDという形で、1年生から6年生のそれぞれの学年に応じた活動をされています。そういった中で、絶えずまちづくり協議会、まちづくりセンターとして交流しています。中学校もそうですが、活動をするときは、我々のしたい活動でも、学校に協力をお願いすることで、お互いに声掛けをして、やりやすいようにしています。

担い手の話がありましたが、老上学区でも、若い方が多いので高齢化率は低くなるのですが、我々は後期高齢者で頑張っています。いかに、皆さんと一緒に次世代に向けて育てるかが問題です。我々の知識で少しでも一緒にやっていきたいですし、特にマンションやブルームタウンなど、声掛けしたら参加してくれます。先日も夏祭りをしましたが、1,500人ほど集まり、いっぱいになりました。若いまちで、いろいろなイベントをしています。ふれあいまつりでも1,000人、1,500人来られますが、普通いないところにそんなに来られても困りますが、来ていただくとありがたいです。そして、我々が次世代につないでいくということをいろいろとやっています。まちづくり協議会としても様々な団体の方がおられますので、そんな方々と一緒に手

を取って、少しでも活動に参加していただけるようにお伝えしていますので、私も気分的には、年を忘れて、若返って、頑張っていきたいと思います。

教育部長

議論もいろいろ出てまいりましたが、そろそろ時間も迫ってまいりましたので、そろそろ集約的なまとめということで、市長と教育長からお願いしたいと思います。市長からお願いします。

市長

今ずっとお聞かせいただいて、私も防災フェスに参加させていただきました。こどものアイデアのバケツリレーは、中にボールを入れて運ぶというもので、屋内でできました。その前には、クイズをつくってみんなでそれを解くことで防災の意識を高めるということもされ、こどもの考えがそこに反映され、こどもも参加して楽しいし、大人も、先ほど若返るという話がありましたが、若返って楽しみながら防災が学べるという素晴らしい取組でした。従来の地域協働合校での限界が出てきている中で、地域版ESD、これはスクールESDをさらに地域とのつながりを深めたものになりますが、これをモデル的にしていただいたということで、老上まちづくり協議会さんありがとうございました。これを私としては 14 学区に広げていってほしいと思います。その場合、気になってくるのが、コーディネーターやサポーターの方々をどのように集めてくるかということです。そのあたりは、スクールESDの関係で各校に一人ずつ配置されているので、その方が探すか、その方自身に地域版ESDにもかかわっていただくという方法もあると思います。それと、できれば、渡井さん、岡田さんに他の学区にも関わっていただけたらありがたいなと思います。また、生涯学習課では、社会教育ということで、こちらが主体となっておりますが、伴走型支援ということで、どんどん広げていってほしいとお願いしたいと思います。

教育部長

続いて教育長お願いいたします。

教育長

今回、老上まちづくり協議会様に多大なる御協力を得まして、このような形でモデル事業ができましたこと、ありがとうございました。地域協働合校の様々な課題も明らかになる中で、一つの仮説を立て、このような形で取組をさせていただき、私自身は地域版ESDに一定の手応えを感じております。当日、現地も見せていただき、こど

もの活躍や主体性の確認をさせていただき、コーディネーターやサポーターさんに、本日もお話を聞かせていただいて、新たな展開として非常に良いのではないかなと思いました。その土台にあるのが、28年目を迎えた地域協働合校で、これは草津市の誇れる教育施策の一つでありますので、これをしっかりと活かしたうえで、2階建てのような形で地域版ESDが他の学区でも続いていけたらと改めて感じたところです。教育はひとづくりとよく言われますが、私が好きな言葉に「地域が人を育て、人が地域を育てる」という言葉があります。まさしくその通りで、地域版ESDが一つの具体的な手段であるのではないかなと思います。教育だけにとどまらず、地域の活性化、まちづくりに広がるように、つながるように改めて感じましたので、これからも14学区にどのように広げていけるのか、教育委員会としても手法をしっかりとしながら、また、老上学区としても子どもたちから来年はどうするのと聞かれていると聞きましたので、そのあたりも含めまして、議論させていただきながら、ともに地域版ESDを進めてまいりたいと考えますので、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

教育部長

ありがとうございました。ただいま、市長と教育長にまとめていただきました「地域版ESDの推進」につきまして、参加いただいた皆さまの共通認識が得られたのではないかと思います。市長、教育長から広がりについても御発言いただきました。本日は、子ども若者部、まちづくり協働部の職員の皆さまも御参加いただきました。また引き続き、御協力のほど、よろしくお願いしたいと思います。皆さまからいただいた御意見を踏まえまして、これからの事業につなげてまいりたいと思います。以上をもちまして、本日の議題は終了となります。

最後に市長より閉会の御挨拶をお願いします。

市長

今日は2つのテーマについて、総合教育会議を開催したところ、様々な、貴重な御意見をいただきました。明日の草津市の教育の未来、草津のまちの未来が展望できたという思いでございます。まずは、教育委員会としての課題整理があると思いますが、市長部局との連携が必要な場合は、連携をしっかりとっていただき、市長としての役割を果たしながら、今後のまちづくりをしっかりと前へ向いて進めていこうという決意を新たにしたいというところで、閉会にあたっての挨拶と決意表明としたいと思います。本日はありがとうございました。

した。

【閉会】 12 時 00 分